

中国雲南省・瀘沽湖における観光化と民族意識の相互作用

金 縄 初 美

はじめに

中国は長い歴史のなかで、多様な民族集団が互いに交流をもち、文化的融合や分離を繰り返す過程を経てきた。

1949 年中華人民共和国成立以降、民族政策の施行、土地改革の実施、文化大革命期の民族文化に対する弾圧や否定的態度によって、従来の社会組織や生産制度は大きく変化した。1978 年の改革開放以後になると、経済の急激な変化、テレビなどのマスメディアの影響などによって、漢族を主とする外部の影響を強く受け、民族文化は著しく変化した。このような著しい社会変化の下、民族文化の実態を静態的に捉えることは不可能であり、動態的に捉えなければその実態がみえてこない。文化を動態的に捉える研究は 1970 年代よりすでに着目されていたが、観光と文化の関わりについての研究が本格的になったのは、1990 年代に入ってからであり、日本においては、1996 年に山下晋司が『観光人類学』を著して以後、本分野の研究が注目された。

本稿は、筆者が 1997 年 3 月から 2011 年 3 月まで、中国雲南省西北部に位置する「瀘沽湖」周辺地域において、母系社会構造について断続的に実施した実地調査の結果を基にしている¹。実地調査では家庭訪問や個人インタビューを行い、当地区に居住する少数民族である摩梭（モソ）人の民族意識

¹ この間、計13回、延べ約6ヶ月の実地調査を実施した。

と自民族文化への認識が観光化による異文化受容あるいは文化的適合を経ながら変化していく過程に注目した。それは、すでに観光業なしでは現在の生活を維持できなくなった彼らの生活において、民族意識の変化が今後の観光を持続できるか否かを大きく作用し、観光化の行方が摩梭人の生活を大きく作用するという相互関係をもっていることを実感し、この変化の著しい今日にこそ、その様相を具体的に描くことの重要性を見出したからである。

本稿では、雲南省・瀘沽湖において社会変化の中心的要因となっている観光化と民族意識が互いにどのような影響を与えているかということについて、具体的事例を用いて考察したい。

1. 瀘沽湖と摩梭（モソ）人の概要

瀘沽湖は中国雲南省西北部に位置する高原湖である。湖の周辺に居住している摩梭（モソ）人は湖を「シナミ（摩梭語で母なる海の意）」と呼んでいる。湖の中央を南北に四川省と雲南省の境界線がはしり、湖の北側は四川省、南側は雲南省に属する瀘沽湖は、海拔 2,685 m に位置し、面積は 48.45 平方 km、平均水深 45 m、透明度約 11 m である。湖の周囲は標高 3,775 m の獅子山をはじめとする高山に囲まれ、地元の人々は獅子山を「乾姆（ガム）女神山」と呼び、崇めている。

湖には 7 つの島があり、その中の 1 つ、黒娃窩（ヘイワウオ）島には土司²の別荘があったが、1950 年代に破壊され、現在はそこに土司の墓とチベット仏教寺院が建てられている。朝陽が昇る時間には、湖水は光をうけて翡翠色に輝き、島々の深緑色の木々が湖にくっきりと浮かぶ。夕暮れになると、湖水は暗く沈んだ藍色に変わり、獅子山が神秘的に湖水に映る。本地域には摩梭（モソ）人をはじめ、彝（イ）族、普米（プミ）族、納西（ナシ）

² 元、明、清の時代、西南地区の少数民族の首長で世襲の官職を与えられた者。

族、白（ペー）族、蔵（チベット）族、傈僳（リス）族、漢族が居住している。

今日では瀘沽湖の美しさと「母系家族と走婚の神秘」をターゲットにした観光開発がすすみ、湖畔の村は観光客で賑わっている。

摩梭人は主に雲南省寧蒗彝族自治县に居住しており、人口は約5万人である。摩梭人における最も際立った文化的特徴は、婚姻家庭形態である。摩梭人の婚姻形態は大きく、「走婚」と「妻方居住」と「夫方居住」の3形態に分類される。「走婚」とは男性が女性のもとに通う婚姻の形態である。日本では「妻問い婚」とよばれる。女性のもとに男性が訪ねて行って婚姻関係が結ばれることから中国民族学の学術用語で「走婚」³と呼ばれるようになり、次第に通称となっていった。「走婚」という呼称の他にも走婚で結ばれる相手のことを「阿注（アチュ）」あるいは「阿夏（アシャ）」と呼び合うことから、「阿注（アチュ）婚」「阿夏（アシャ）婚」という場合もある。「妻方居住」は婿入り婚で、この形態は多くの母系社会で見られるが、摩梭社会では一般的ではなく、走婚相手の家族の男性成員が不足しているときに行われる。「夫方居住」は嫁入り婚の形態である。摩梭人社会では走婚をする男性の姉妹が少なく、女性成員が不足している場合、女性が男性の家庭に移り住むことによって「夫方居住」となる。また、文化大革命期には妻が強制的に夫の家に嫁つがされた場合もあった。

1996年に18歳以上の952名を対象に行われた調査によると、「走婚」を行なっている人は356人で、全体の37.39%を占め、「妻娶婚」を行っている人は302人で、全体の31.72%を占めている。婚姻をしていない人は294人で、全体の30.88%占める〔和鐘華2000：45〕。

摩梭の家族形態も母系家族、母系父系並存家族、及び父系家族の3形態に

³ 中国語では歩くことを「走」と言う。歩いて通う婚姻という意味から「走婚」と名付けられた。

分類される。母系家族では、成人男女は走婚を行い、男は妻を娶らず女は嫁がない。男は夜になると走婚相手の家に行き、早朝自分の母親の家に帰り生活、労働をする。女は一生母親の家で生活をする。血の純潔を望み、配偶者は引き入れないため、家族には婿や嫁、姑、小姑等の関係はない。1つの母系血縁集団であり、基本的に祖母—母—娘と代々女性が後を継ぎ、財産も母系によって継承される。母親を崇拜する観念が強く、母親を中心に団結している。各家族には「達布（ダブ）」と呼ばれる家長（一般的には、仕事ができる女性が担当する）がいる。ダブは家族の生産計画、労働の分配、食事の計画、財産の管理、家事全般の責任をもつ。宗教祭祀や比較的大きな売買、住居建築など、婚姻以外の社会的交際は能力のある男性が受け持つ。また、母系家族は分家が少なく、姉妹が多ければ、さらに子孫が増えることになるため、家族は少なくとも10人前後で、多ければ20～30人になる。家族が多いほど、労働の分配が可能になるため、一人当りの労働負担が軽くなり、生活が豊かになる。そのため、分家をせず大家族を好む摩梭人は、周囲の民族より豊かであったという。

母系父系並存家族は1つの家族に母系の成員もいれば、父系の成員もいるという構造である。1代ずつ母系父系が交互になっている家族もあれば、母系が何代か続いた後、父系が現れる家族もある。母系父系両者が並存する構造が生まれるにあたって主に以下の理由が挙げられる。①女性継承人がいないため、男が妻を娶るが、その下の代のものはまた走婚を復活させる。②男は妻を娶るが、女は嫁がないという状況により、母系と父系が並存する。

父系家族の特徴は、成員全員が父系で、通常4～5人家族で、男性が家長をし、男は妻を娶り、女は嫁にいき、財産は父子継承をする。摩梭社会では、母系制の影響が強いため、父系家族の基盤はとても不安定で、2～3代続けて男は妻を娶り、女は嫁つぐことを繰り返してようやく形成される。家族の規模はとても小さく、一般的に夫婦とその子供だけで構成されている〔宋兆

麟・嚴汝嫻1983 : 360]。摩梭の父系家族は、家族が少なく、ともすればすぐに母系父系並存家族になってしまうほど基盤が弱く、普遍的ではない。

使用言語はチベット・ビルマ語族に属する摩梭語（納西語西部方言）である。民族の祖先は古代氐羌族であると考えられており、古代戦乱から逃れるため中国北方から四川省を経て南下し、雲南省寧浪地区に至ったのち、一部は金沙江を渡って麗江に定住し（現在納西族）、一部はさらに中甸（現在は納西族、一部はチベット族）に至ったと考えられている。生業は河谷や盆地では棚田を中心に水稻やトウモロコシ、野菜類の栽培を行い、山間部の盆地ではジャガイモ、ダイズ的一种白雲豆の栽培やヤギやブタなどの家畜の飼育であるが、上述した通り、1990 年代初頭以降、「瀘沽湖」湖畔での観光業が非常に盛んになっている。

2. 民族意識の形成

1) 民族識別の過程

民族意識は往々にして、接触する対象によって、流動的に変化する。多民族国家中国、特に雲南省のように多くの民族集団が雑居する環境においては、同村あるいは近隣の地域に居住する小規模の民族集団間の接触がアイデンティティの認識に相互影響を与えている。岡本雅享氏が述べているように、雲南少数民族の民族意識は自称に基づく下部集団内で完結することが多く、それを越えて広範囲に共有されるケースは少ない〔岡本雅享1999 : 83〕。一方、これらの小規模、あるいは大規模の民族集団をまとめあげて国民国家を成立しようとした時、「中国人」という国民意識を国家領土に住む人々に与える作業が必要となり、国家はさまざまな民族政策を推し進めなければならない。中国において民族集団の社会空間の境界線を創出したものが「民族区域自治制度」であり、中国の民族政策の根幹になっている。

「民族区域自治制度」は、中華人民共和国建国に先立つ 1949 年 9 月 29

日に公布された「中国人民政治協商会議共同綱領」で「みな平等の権利と義務を有する」（第9条）存在とした上で、「各少数民族が集合居住する地区では、民族の区域的自治を実行する」（第51条）と規定したことに始まる。共同綱領には民族区域自治を実行する少数民族地域が中華人民共和国の不可分の領土であるとは明記されていなかったが、「区域自治」が国家からの独立分離を否定するものであったことは明白であるとされる〔国分良成・星野昌裕1998：426〕。1952年に発布された「民族区域自治実施綱要」では、「各民族の自治区はすべて中華人民共和国の不可分の一部である」と、分離権を含む民族自治権が否定され、民族区域自治制度は国民的な政治体系のもとに位置づけられた。

その後1984年5月に採択された「民族区域自治法」では、「少数民族が集散的に居住する地方では、当該地方の民族関係、経済発展などの条件に基づき、また歴史的状況を考慮して、ひとつまたは複数の少数民族が集散的に居住する地域を基盤とした自治地方を樹立することができる」（第12条）と規定し、また「民族自治地方の自治機関は、自治区、自治州、自治県の人民代表大会および人民政府である」（第15条）とも規定している。

上述した「民族区域自治制度」を推し進めるにあたって不可欠な政策となったのが「民族識別工作」である。1950年代全国人大民族委員会と国務院民族事務委員会は大規模な「中国少数民族社会歴史調査」を実施し、1954年には400あまりもの少数民族が独立した民族になるために中央政府に独立名称の要求をした。中央は何百人もの学者を派遣し、合計4千万字あまり、約300部の調査報告を提出した。雲南省の場合、1951年に雲南省民族事務委員会内に設置された調査研究所は、中共雲南省委員会と同省人民政府の要請を受けて、省内の民族識別工作及び諸民族の人口と分布の調査を開始する。その調査結果として「雲南省兄弟民族人口分布初步統計」を発表した。民族名称は数百種におよび、簡単な整理を経てもなお132種もの民族が残った

という〔松村嘉久2000：93〕。

1953年には彝（イ）、白（ペー）、傣（タイ）、苗（ミャオ）、瑶（ヤオ）、回（カイ）、蔵（チベット）、納西（ナシ）、哈尼（ハニ）、傈僳（リス）、拉祜（ラフ）、景頗（チンポー）、佤（ワ）の13民族が単一民族として確定される。しかしこの決定に各民族の合意がみられたわけではない。

1954年3月、「民族識別工作」は雲南民族識別研究組に引き継がれる。この研究組は民族学者やその他の研究者を中心とした46名で組織されたチームで、結成後約5ヶ月後の同年8月までに29の少数民族を認定した。

同年末、21の「少数民族」を正式に確定。53年に決定された13の民族に加え、壮（チワン）、布朗（プーラン）、阿昌（アチャン）、怒（ヌー）、普米（プミ）、德昂（ドアン）、独龍（トールン）、蒙古（モンゴル）の8民族が認定された。

全国的には1954年から1964年まで全国2次人口調査が行われ、広い範囲で民族調査が行われた。その後文化大革命期には民族識別作業は中断され、1978年の11期3中全会以後に再開し、1979年基諾（ジノー）族が認定されて55の民族が確定した。

各民族の実態調査においては、1958年、國務院民族事務局委員会と中国科学院哲学社会科学部の指導のもと、中国科学院民族研究所、中央民族学院会によって認定された民族ごとに、『少数民族簡史』『少数民族簡志』『民族自治地方概況』を編集し、各民族の歴史、生活習慣、言語、婚姻形態、経済などの調査を進め、識別作業の安定に寄与した。

上記の民族識別の過程から、多くの民族集団を55の民族に集約するのは非常に困難をともしう過程であったことが分かる。「民族識別工作」がおさまりを見せた後にも認定された民族名を不満に思い、新たに認定作業を行うよう要請する民族も多かった。1982年から1989年には第3回全国人口調査がおこなわれた。その作業の重点はいくつかの民族を回復或いは改定する

ことであった。1990年になると、民族委員会、公安部、国務院は第4回人口調査を行い、「中国公認民族的規定」⁴を発表し、中国共産党政府は現在認定されている55の少数民族数をこれ以上増やさないという方針を示した。そして前述したとおり、その時点で、特定のエスニックグループと認定された民族には、「～人」というカテゴリーを設けることになった。それらのグループは基諾族の支系から独立した「苦聰人」や納西族の一部から独立した「摩梭人」などである。

2) 「摩梭人」の誕生—民族名称の認定過程

「摩梭人」という名称については、1950年に実施された麗江専区第二次各族各界人民代表大会の文献に、「会議に出席した代表には13人の摩梭人」という記載がある。1956年9月5日、麗江専員は雲南省人民委員会の『關於建立寧蒗自治県的報告』の中に「摩梭（モソ）族」という名称が挙げられている。それは「彝族が集中して居住する寧蒗、涼山には、彝、摩梭、漢、西蕃、傈僳、蔵、白、仲家、納西、苗、摆衣、回などの12の民族がおり、……」「摩梭が集中して居住する3つの郷」「摩梭族はチベット文字が分かる」⁵「摩梭と西蕃（普米族）はラマ教を信仰している」とある。これらの報告は省人民委員会が国務院に伝達し、寧蒗で執行することが許されたものである。1959年、中国共産党寧蒗工委事務室が編纂した『寧蒗概況』でも、数箇所にならって「摩梭族」を取り上げている。しかし、民族識別の際には国家の関連部門は雲南の寧蒗等に住む摩梭を納西族に帰属させ、四川塩源、木里、

⁴ 『中国公認民族的規定』では以下4つの事項が発表された。(1)民族を確定する時は国家が正式に認めた民族名称を基準にする。(2)個人の民族は父あるいは母の民族によって確定する。(3)異なる民族の者同士の婚姻によって生まれた子どもは18歳以前には父母の意見によって決められ、18歳になると本人が決めることができ、20歳になると民族を変更することは出来ない。(4)異なる民族の者同士が再婚した場合、子どもが18歳未満であれば義父母によって決められるが、18歳以上は再婚前の民族を変えることはできない。(5)異なる民族成年の間に養育、婚姻関係が結ばれても各自の民族は変えることができない。(6)もともと確定している民族は自由に他の民族に変更できない。(7)この規定に基づいて民族を変更したい時は本人の所在する人事部門か居住地区の事務室、郷鎮人民政府の許可を得て戸籍管理部門で手続きをする〔勝星・王軍2002:164〕。

⁵ 「摩梭族はチベット文字が分かる」というのは実際には事実と異なる。

塩辺などに住む摩梭人を蒙古族に帰属させた。その後、多くの摩梭人幹部と民衆は、様々な形式とルートを通じて国家関係部門に対し迅速に摩梭族という呼称を回復するように要求した。寧蒗県の代表は全国5期1回人民代表会議、全国6期1回人民代表会議、全国7期1回人民代表会議において、摩梭の族称を回復する問題を雲南省人民代表団の重要提案の1つとして提出した。このような摩梭人の強い要求と、県、政府及びその他の民衆の幾度にもわたる報告によって、関係部門からも重要視されるようになっていった。1989年9月には、省人民代表常委員会が省人民大会委員工作組を寧蒗に派遣して調査を行い、同年12月6日、工作組が省委員会、省政府、省人民代表常委員会に寧蒗摩梭族の族称回復に関する報告を提出した。このようにして、雲南省人民大会常委員会は1990年4月27日、7期11回会議を開き、『寧蒗彝族自治县自治条例』の中で「摩梭人」という名を確認し、この条例は1990年10月1日に正式に発布された〔寧蒗彝族自治县志編纂委員会1993：176〕。

宋恩常氏の報告によると「永寧納西族の母系に関する資料を探すため、1960年11月初め私たちは永寧納西族地区において、社会経済、政治と家庭制度の調査を進めた。永寧納西族、自称摩梭で、1951年国務院を通じて納西族と定められた」とある〔雲南省編輯組1987：1〕。宋氏の現地調査を引き継いだ王承権氏は、「永寧納西族は自称“納日（ナリ）”で、漢名称は“摩梭”である」と述べている〔雲南省編輯組1988：1〕。

以上の記述から見ると、寧蒗地区では、「摩梭」という族称が浸透しており、摩梭人は国家の民族識別にかかわらず従来より「摩梭」という名称で呼ばれてきたことから、「摩梭」が「納西語」の東方言を話すグループで、納西族と同じ民族的ルーツを持つという理由のみで「納西族」に識別されるのは非常に矛盾があったことが分かる。そのため、1959年に編纂された『寧蒗概況』にも現地では通称としてなじみ深く、またはっきりと「納西」と区別ができる「摩梭」という族称が使われているのであろう。1960年代に政

府の任命により行われた民族調査でも、麗江地区に住む「納西」と寧蒗地区に住む「納西」つまり「摩梭」は文化や経済、宗教などの面において明らかに異なることが確認されていた。よって多くの調査報告では「摩梭人」という名称が回復するまで、「麗江納西族」と「永寧納西族」という名称で区別されて使用された⁶。

瀘沽湖周辺に居住する他の民族集団の識別も非常に複雑である。瀘沽湖周辺には、従来から主に摩梭人と普米族と彝族と漢族が居住していた。瀘沽湖の中央に四川省と雲南省の境界があるが、識別工作は省単位で民俗学者を派遣して調査が進められたため、衣食住、信仰宗教、民族的ルーツなどの文化的背景や言語が同じ民族集団が、四川省側では「蒙古族」、雲南省側では「納西族」と識別されたのである。なぜ「蒙古族」であるかという、彼らの間に伝わる伝承から、フビライの時代、蒙古軍が雲南征伐を行った際に取り残された蒙古族の末裔だと認識されたからである。また、瀘沽湖周辺に居住する普米族はその周辺の民族集団から「西番（シーファン）」と呼ばれており、古代漢族が彼らに対して用いていた民族名を使用している。しかし、中国の広い地域において「西番」とは歴史上中国西北地区の少数民族のことを指す。普米族はチベット族と同様にラマ教を信仰しており、普米族男性の服装はチベット族のものとはほぼ同じである。言語においても瀘沽湖周辺に居住する普米族の使用する普米語と四川省木里チベット自治県に居住するチベット族の言語は非常によく似ているという。2000年8月に共同調査を行った四川省木里チベット自治県出身のチベット族の女性は、瀘沽湖周辺の普米族との会話に不自由はなかった。風習や言語における類似点が多いことから、この地の普米族と四川省木里のチベット族の祖先は非常に緊密であったと予想できる。この状況からみると、民族の名称は①古代の名称、②現在の自称、

⁶ 例えば詹承緒・王承權・李近春・劉龍初（1980）『永寧納西の阿注婚和母系家庭』上海人民出版社や宋兆麟・嚴汝嫻（1983）『永寧納西族母系制』雲南人民出版社などの研究書が挙げられる。

③他称、④識別によって認定された名称という形で重層化していると考えられる⁷。

3) 観光化と民族意識の芽生え

1990年、「摩梭人」という名称が認定されたのとはほぼ同時期に、瀘沽湖の雲南省側の湖畔に位置する落水村では観光開発が始まった。観光開発は雲南省寧蒗彝族自治州政府と当時の落水村村長の意向によりはじまったが、この観光の目的は主に「瀘沽湖の美しい景観を觀賞すること」と、「漢族とは違う習慣をもった摩梭人に会おうこと」で、摩梭人の伝統文化を外に打ち出す契機となった。瀘沽湖での観光は摩梭の伝統文化に焦点が当てられていることを考えると、観光化が始まったことと「摩梭人」を「納西族」と区別してほしいという運動が高まり「摩梭人」というエスニックグループが政府に認められた時期が重なったことは、単なる偶然ではないと思われる。『中国少数民族散歩』のなかで「公認された民族集団の民族名称は、政府によって承認された民族名であり、必ずしもその民族の自称ではない、ということを強調しておきたい。(途中省略) 納西族の一部であるかつての摩些(モソ)も、自称であるモソを使用しており、特に彼らは「摩梭人」と称している」と記されているように⁸、改めて公認された名称は自称であると思いがちであるが、上述したように、摩梭という名は古代より歴史書にその名が見え、漢族が彼らを「摩梭」と呼んでいた他称で、自称は摩梭語で「ナリ」という。「ナ」は黒という意味、「リ」は人という意味で、「黒い人」という意味である。

自称ではなく、現地の他民族からよばれている名称での識別を要請したのはなぜだろうか。彼らの居住地が彝族自治州で、彝族の幹部が多いため幹部から捉えた族称で申請したのか、それとも他民族からの目を意識して、広範

⁷ 拙稿(2006)『摩梭(モソ)人の母系社会構造とその変容』博士学位論文(西南学院大学大学院国際文化研究科)未出版、221-225頁を参照。

⁸ 谷口房男・飯塚勝重(2004)『中国少数民族散歩』総和社、200頁参照。

的に使える呼称にしたのであろうか。この点に関してははっきりしていないが、「観光化の推進」と「摩梭という名称の回復」は同時期におこなわれた